

平成28年度秋田県総合政策審議会第2回地域力創造部会（議事録要旨）

1 日時 平成28年7月26日（火）13:00～15:30

2 場所 五城目町地域活性化支援センター

3 出席者（敬称略）

【地域力創造部会委員】

丑田 香澄（五城目町地域おこし協力隊員）
藤原 弘章（NPO法人ふじさと元気塾理事長）
山崎 純（NPO法人子育て応援Seed理事長）
山本 智（農園レストラン「ハーベリー」代表）

【オブザーバー】

丑田 俊輔（ハバタク株式会社代表取締役）

【県】

妹尾 明（企画振興部次長）
鶴田 嘉裕（企画振興部総合政策課長）
神谷 美来（企画振興部総合政策課政策監）
奈良 聡（企画振興部市町村課長）
恵比原 史（企画振興部地域活力創造課長）
佐藤 廣道（企画振興部活力ある集落づくり支援室長）
真壁 善男（企画振興部人口問題対策課長）
久米 寿（企画振興部人口問題対策課政策監）
伊藤 仁志（健康福祉部長寿社会課政策監）
土田 元（健康福祉部子育て支援課長）
伊東 弘毅（生活環境部男女共同参画課長）
小柳 公成（教育庁幼保推進課長）

4 あいさつ（妹尾企画振興部次長）

- ・今回は県庁を飛び出して自然豊かなこの場所での開催とさせていただいた。
- ・今回の議事については既に委員の皆様がメールで議論を進めていただいているところではあるが、今日はその議論を改めて進めていただきたいのでよろしく願います。

5 オブザーバーの紹介

- ・ 丑田俊輔氏を紹介

6 議事要旨

(1) 前回部会以降の論点整理

●山本部長

- ・ 今日とは2回目の部会となるので施策の内容に入っていきたい。今日は丑田俊輔さんにオブザーバーとして出席いただいているので、俊輔さんからお知恵を頂きたいが、参加が2時までとなる。2時から委員の提言の内容やメールでのディスカッション等について議論していきたい。
- ・ 最初に、メールでやりとりしたものを部会資料-1としてサマライズしているのですが、事務局から説明をお願いする。

□鶴田総合政策課長

- ・ 部会資料-1を説明

●山本部長

- ・ 左下の「地域総合総社」は「地域総合商社」の誤りである。あと、間違いではないが、「秋田ファンづくり」にストンと矢印が落ちているが、「次世代ドチャベンのあり方」からも右につながっていくのが、潜在的予備軍への働きかけにつながっていくので必要。
- ・ ここ1箇月半ぐらいメールで議論しているものをサマライズしているが、足りないところなどがあれば発言いただきたい。

<特段意見なし>

●山本部長

- ・ 特にないようなので、資料-1はこんなところで。
- ・ 次世代ドチャベンのあり方について、オブザーバーの俊輔さんからお知恵を頂きながらディスカッションしていく。
- ・ この部会の中ではドチャベンについては良い諸施策だという一定の評価がある。今年は2年目になっているが、底辺を広くするというよりは、少数精鋭の人材、質の高い移住者に地域に入り込んでいただき、地域に風を吹かそうという施策である。二巡目に入ったところで、実際に起業された方もいるので、俊輔さんから現況や、当初考えていたものと現在うまくいっているところや課題が見えているところがあれば発言いただきたい。

●丑田オブザーバー

- ・ 昨年のドチャベンは結果的に五城目で2つ、横手で1つの会社が起業し、横手ではもう1つ起業の準備をしているので計4つの移住起業家が誕生している。
- ・ それぞれの活動はまだ小さいが、象徴的な形で、ある意味外来種で生きのいい起業家が秋田の中でゼロから仕事を立ち上げることができるという自信や、機運が秋田の中で伝播していくことが大事と感じている。
- ・ 昨年のドチャベンは11月のビジネスプランコンペで選ばれた人が支援を受けて起業しているが、余波として、コンペから落ちてしまった方やプランを出さなかったけれどチャレンジしたい方が4人ぐらい新しいチャレンジに取り組んでいる。
- ・ このセンターには現在10社が入居しているが、来月も3、4社が入ってくる予定であり、チャレンジする人が少しずつ増えていくことで、連鎖反応というか、人が人を呼んで集まってくるという効果が出てくることを期待して活動している。
- ・ ドチャベンという施策は万能ではなく、そこで生まれた新しい取組が少しずつ増えていく時に、普通に自分の地元で暮らしたいとか、東京で仕事していたけど地元の会社に転職したいとか、そういった方々も含めて誇りを持って働ける会社が秋田の中にどんどん生まれて、内発的にわき出てくるような文化、機運ができればよい。
- ・ ドチャベンは2年目になり、今年は鹿角と湯沢という北と南の両極端の場所であるが、滑り出しはまずまずで、7月8日のオリエンテーションには合計100名ほどが参加していいスタートが切れている。
- ・ 火種を大きくすることにはパワーが必要だが、鹿角も湯沢もキーパーソンとなるような方が地元において、そうしたところが大事。火種になるような活動をする人と、地元を結び付けて、地域のうねりを作り出せるかどうか。現地に火種になる方がいないと仕組みだけあっても広がっていかないので、そこを丁寧に進めていくことが課題である。

●山本部長

- ・ ドチャベンは前回も今回も2地域となっているが、やってみたいとエントリーしたところは少なかったのか教えてもらいたい。

□真壁人口問題対策課長

- ・ 今年は4市町からエントリーがあり、前年は5つとなっていた。

●山本部長

- ・ 地元の熱量が重要で、熱量がないところに仕組みだけ与えてもうまくいかない。
- ・ この2市町だけではないが、農村部に風を吹かせようとする10年以上かかってしまうので、もうちょっと拍車をかけていくことができないかと感じている。そこが現実的

にやってみると難しいところではないか。

●丑田オブザーバー

- ・ キーワードは「人」が最初だと思う。行政の中の方でもいいし、民間でもいいが、自分の暮らす地域でビジョンを持って活動していることが非常に大事。そういう人が育っていく環境や、または既にいて気づいていないだけかもしれないが、そうした人を軸に展開していくことが必要。

●山本部長

- ・ ドチャベンに手をあげるかどうかは行政のラインで募集しているのか。

□真壁人口問題対策課長

- ・ そのとおりである。

●山本部長

- ・ 例えば藤里の元気塾のように、キーマンとなる移住やインキュベーションマネージャー（以下「IM」と表記する。）がいるNPOに届いていないのではないだろうか。
- ・ 能代で会社を立ち上げた人と話したことがあるが、ここでは起業が少なく、何とかしたいと想いのある人間がいるが、行政側とマッチングができていないため起業が見えてきていない、と言っていた。これは能代だけの話ではないと思う。
- ・ 数を増やせばいいという論議ではないが、市町村が起業に対して及び腰になっている雰囲気がある。もう少し、見えていないけれど地元に住むキーマンを浮き彫りにしていくことが必要になってくる。

●藤原委員

- ・ 県内にはIMが結構多いが、そういう人たちと話をすればいい。地域のことを考えていて、移住者の受け皿となったりしてプラスになっていると思う。
- ・ また、移住者だけではなく大学生を対象にできないだろうか。一番期待しているのは大学生である。ドチャベンの枠からは外れるかもしれないが、そこまで広げてもいいのではないか。

●丑田オブザーバー

- ・ 各地にいるIMとの連携は大事である。横手のIMも相談に乗ってくれているが、どういうサイズ、どういうインパクトで起業を生み出していくか。ビジョン、規模感、方向性などはビジネスの世界でもピンキリである。「起業」、「インキュベーション」というキーワードはとても幅広い。
- ・ 地域における社会的なインパクトを大きくしていこうという人を対象としていく時は、

既存の IM との整合性を見極めが大事である。

- 大学生についてはそのとおり。外からの人材を起爆剤とするのも良いが、地域の中から連鎖し、生まれてくる環境を創り出すことも必要となる。学生や若者がそれぞれの領域でチャレンジできる仕組みがあればよい。
- ドチャベンは大きな母数から優秀な人をハントしてくるという狩猟的なイメージだが、県内では同じようなスキルや情熱を持った人がすぐには見つからないので、農耕的なイメージでゆっくりと育てていくケース設定や、いきなり起業するのではなく半起業的なグラデーションが生まれてくる仕組みなど、中から育てていくことが重要。

●藤原委員

- 大学生はプロセスが違うので、育て方も違ってくる。

●山本部長

- ドチャベンと学生については違う論議ではない。移住＋人材獲得や、起業としての人さらいという意味でのドチャベンの発展系として、留学生や高校生も含めた学生が、自分たちのふるさとにある地域資源を発見し、そこに着目するようになると、そのうち何人かは起業に発展するかもしれない。もしかしたら、ふるさと教育の一環になるかもしれないが、そういった取組が重要。
- もう1つは、せっかく秋田に来てくれた地域おこし協力隊の38名をいかに定着させるか。ドチャベンの手法は、就業や帰農、場合によっては起業も含めて、任期の3年間で隊員のアイデアを育てていき、独り立ちさせていくというところには有効である。
- 併せて、市町村の受け入れ側の教育も必要。緊急雇用の採用と同じような考えで協力隊を扱っているところもある。外から来た人間を3年で羽ばたかせるのは重たい仕事になるので、そうした自覚も必要である。

□妹尾企画振興部次長

- 通常の起業については産業労働部で支援を行っているが、なかなか地域おこしには結び付いていかない。
- ドチャベンの手法をもう少し地域づくりにつなげていきたい。
- 大学生の起業については、同じく産業労働部が講座で起業の前段階の啓蒙普及を行っている。

●山本委員

- 移住に絡めて、学生や地域おこし協力隊への教育啓蒙活動のほかに、今住んでいる人への働きかけが重要になってくるが、母数が多いだけに、その中の少数に働きかけても薄まってしまう気がする。

- ・ 秋田は起業率が全国の中間値より下の方にあるので、ここに働きかけるよりは、同じパワーを使うのであれば、移住者や地域おこし協力隊を対象にしたり、長期間なスパンになるが学生を対象とする方が有意義と考える。
- ・ 教育については、五城目ではドチャベンのスキームとは違った形でいろんな活動をしているのでそこを紹介いただきたい。

●丑田オブザーバー

- ・ 秋田で仕事があるということが大事。秋田は教育のブランドもあるのでそこをアピールすることもよいが、これからの時代の若い世代に向けてのキーワードとしては、学力・体力は当たり前のこととして、次の世代に秋田がチャレンジしていくようなメッセージが出せたらよい。
- ・ 五城目での教育については、ほとんどボランティアではあるが、自分の1割ぐらいの時間を次の世代を育てるために使っていこうという感覚でやっている。
- ・ 五城目小学校6年生の総合学習で国際教養大学の学生に来てもらい、五城目にいながら世界一周するという授業や、五城目高校では県出身者とのつながりから、東京大学大学院の高齢化社会の持続的可能性を研究している研究チームと連携して、高校生が自分の住んでいる地域を探求して、その成果を町や海外で発表する取組を進めている。
- ・ こうした取組ができれば、偏差値とは違った軸で子ども達の学び方や自信の付け方ができるのではないかということで、協力隊員を中心にそうした取組を行っている。

●山本部長

- ・ そうした現場は丑田委員も一緒に取り組みられていると思うが、感触としてはどうか。

●丑田委員

- ・ 若い世代の素直さが印象的である。
- ・ 授業を行う前は、最初は秋田には何もないと言っている学生が、3か月から半年間、様々な可能性に自らの足で触れることで可能性に気づき、意識が柔らかく変わっていき、いずれ自分が秋田で子育てすることについて考えたり、未来のとらえ方や、秋田出身であることに誇りを持つようになるなど分かりやすく変わっていく。
- ・ 秋田が、子育て、教育を声高に謳っていく上で、既存の沢山ある子育ての魅力に加えて、新しい取組を加えることで今後の未来につながっていくのではないかと。

●山本部長

- ・ 山崎委員が子育てに関連して、新しい公共にはボトム的な力が必要という意見を頂いていたが、将来の秋田を支えていくための子育ての一環としてそうしたキーワードがあるのではないかと思うがいかがか。

●山崎委員

- ・ 新しい公共は近年では共助社会の形成と言われるようだが、そこにはボトムアップの力が必要で、トップダウンではいけないと思う。住民が主体的に考え、自ら動いていくような仕組みが必要。
- ・ 例えば、地域の小さなグループが、使い勝手のよい予算で、自らの自由な発想で行った事業が、他者から認められるなど小さな成功をすることで、自信になっていくと思う。そうした成功事例をつなげていくことで、人や地域が元気になっていく。
- ・ そうした観点からも既存の事業を、もう少し主体的に動けるような、使い勝手のよい事業に見直していくことも重要ではないか。

●山本部長

- ・ 学生の起業と教育には連続点があり、学生の起業には教育的な要素も含まれると思う。

●藤原委員

- ・ 実際に起業している人と大学生、新しく来た人が一緒に生活することができないか。起業だけでなく、起業したいと考えている人も一緒になって話をすることで意識が育っていくのではないか。

●丑田オブザーバー

- ・ 同じ空間で、同じ時間を過ごすことで、問題意識や志向のきっかけになるので非常に大事である。東京では都市なのでネットで探せば関心のあるベンチャーやNPOなどに接する機会はあるが、地域ではその役割を担う所が少ない。地域内のNPOやベンチャーなどが、学生にとって好奇心をそそるようなビジョンを持った経営者を束ねて、そこにインターンシップで送り込むというような形態の起業も育ってきているので、そういった役割はあってもいいかもしれない。
- ・ 例えば、秋田市から湯沢の酒蔵に気軽に行くのは難しいかもしれないが、夏休みに酒蔵に学生を2週間泊めて作業してもらおうといった仕掛けがあればいいかもしれない。

●丑田委員

- ・ 五城目町地域活性化支援センターには大学生も出入りしている。県内だけでなく、県外から大手企業に内定した学生が、就職までの半年間、住み込みで勉強したいとやってくるケースもある。
- ・ 外から強力な人材を獲得して地域住民との融合ができれば、そこに人が集まり、緩やかな起業予備軍が集まってくると思う。

●山本部会長

- ・ 昨年の部会からの提言でも、つくる場と束ねるものを市町村と連携してつくりたいと提言したが、今回にもつながる。外からのインパクトは必要だが、「多様な」というところが日本人は苦手。
- ・ なかなか同意できないところを強く持っているのが秋田県人であるが、逆に、外からのインパクトに対して最初は壁があるものの、一旦受け入れるととても尊重するところもある。新しい物好きで、一緒にやってみようという好奇心が濃厚にあるので、外からインパクトを持ってきて風を吹かすという手法は秋田にはかなり通用するのではないか。

●丑田オブザーバー

- ・ この部会のスコープはどこになるのか。

●山本部会長

- ・ 大きくは人口減少の歯止めが1つ。あと人口減少がトップレベルでも、住んでいる住民が生き生きとしているにはどうするべきかとういところで、移住・定住の促進、子育てに優しい社会づくり、協働社会の形成の3つが重要。

●丑田オブザーバー

- ・ スコープの3つめの地域協働社会の視点は施策が大事。
- ・ ドチャベンでは田舎でも民間で稼げる形を作ろうというのがメッセージであり、田舎だから仕事がない、ではなくて試行錯誤しながらやっていくことが必要。
- ・ そうした時に、お金の外側にもしっかりとセーフティネットや経済効果もあるのが田舎であり、最近の若い世代はそこに魅力を感じているからこそ、田舎に住みたいということを行っているのではないか。
- ・ 「郷土」というキーワードのほかにも、自給自足や、ポスト3. 1 1の世界観の中で、お金の外側をどう見るか。稼ぎに行く施策が「攻め」だとすれば、「守り」になるが、今までお金をかけてやっていたものを共助でできたり、買っていた物を自給できるといったような生き方のグラデーションが作ればよい。半分ベンチャーで、半分農業やるような人がいてもいいし、1 / 3は子ども達の教育にボランティアに関わったりと、多様な生き方のできる環境を秋田県がビジョンとしていくことができれば、共感を引きつけることができるのではないか。
- ・ やることを決めていくということと、やらないことも決めないといけない。今まで使っていたお金を別のことに使うことも必要。例えば、道路を自分たちで直すような人たちが住んでいる集落を若者がいいと思ったり、持ち寄りの地域のコミュニティをしっかり

つくっていくことも大事になる。

- ・ そうした守りと攻めの秋田のビジョンをしっかりと言葉にしていくことが必要。

●山本部会長

- ・ 資料の本質論議のところにある言葉は全て行政の枠の中にあるものではなく、住民の中にあるもの。そういう気持ちと、来年に向けた提言をどうやってマッチングさせるかが難しいところである。
- ・ 行政はユニバーサル的な展開を進めていく仕組みと、先導的な地域をモデルケースとして支えていくという2つのやり方がある。民間の力があるところをどうやって、見逃さないのが重要になってくるので、これからの論議に反映させていきたい。

□鶴田総合政策課長

- ・ 先日の知事と県民との意見交換で、県外から来ている大学生が秋田で起業したいという意見もあった。若い方と起業家と一緒に集う場が必要だと思う。県内にいくつかそうした場所ができ、ネットワーク化していけば理想的ではないかと思うがその辺はどうか。

●丑田オブザーバー

- ・ 空間は大事。一緒にご飯を食べたりワークショップをやったりと、リアルな場があることで、インターネットでデジタルな時代になったからこそ、実際に膝をつき合わせて考えていくということの重要性は増している。
- ・ 新しい綺麗な施設があればいいかというところでもなく、最近では秋大生がシェアハウスを作り、そのシェアハウスを町の中に開放して、いろんな人が集まってくるという取組をしている。そこは古い空き家を自分たちで改修して使っているので、自分たちで作っていく感覚や、昔からあるものを丁寧に見直しながら使っていくというような精神性も含めて最近の学生の感度を大切にしながら場を作っていくことが大事な気がする。

●藤原委員

- ・ ここの施設は理想的で大部屋と小部屋の上に廊下があり、共有スペースになっているほか、共有の部屋も随所にある。これだけ揃っている施設はないので、日本に誇れるようなものを作っていただければと思う。

●丑田オブザーバー

- ・ 昔の学校だと教室が区切られていて狭い廊下であるが、今の建築はオープンで壁のない教室や、地域の中で門がなくなだらかに入りやすいがセキュリティは IT できちんとされているようなものもある。オープンな空間設定が重要。

- ・ そういったビジョンから建築が考えられる時代になってきている。

●山本部長

- ・ 企業でも大事な決断は会議ではなく、雑談で決まる。
- ・ ここで時間になってしまったが、オブザーバー参加ありがとうございました。

<丑田オブザーバー退席>

(2) 次年度に向けた提言について

●山本部長

- ・ 委員の皆さんからアイデアを頂いているので説明をお願いしたい。

<各委員からの提言骨子資料を配付し、各委員から説明>

●藤原委員

- ・ 多様なというところが秋田県の弱み。女性が力を出すには環境づくりが大事である。女性は考え方が違うし、子供から大人までトータルで考えた場合、生活という面で男性よりも優れている。
- ・ 秋田県は農業高校、工業高校、商業高校が減っているが、商店や農業経営者と直接会うといった関係性があるので、学校の単位として高校生のアイデアを生かすことで、結果として地域内での就業に結び付く可能性があるのではないかと。
- ・ 教育に関して、国際教養大学や秋田大学に海外や県外から沢山学生が来ている。彼らを取り込む、あるいは彼らに秋田で力を発揮してもらう仕組みづくりがあるとよい。留学生を通して国と秋田の関係もできるし、県民の意識も上がっていく、秋田県にはそういう可能性がある。
- ・ また、秋田からも高校生を留学生として派遣し、海外で秋田の学生が学び、感性を磨くことができる。双方向で学生や若い人たちが力になっていくようにお金をつぎ込んでいくことで、変革が見えてくるのではないかと。
- ・ 移住に関しては、外から見た秋田がすごく大事。市町村単位ではなく秋田県として見た時に、福井県の池田町でも行っているが、家庭からの生ゴミなどを集めて有機肥料を作って安く配ることで有機農業に簡単に取り組める、といったような発想が大事。生ゴミだけでなくスーパーの廃棄などを回収しながら、市町村の倉庫などを活用して有機肥料を使って有機農業に取り組めるようになれば、外からインパクトのある秋田の魅力が出るのではないかと。移住してくる人たちは、有機栽培も含めて自給自足をやりたいという意向がある。都会の人はそうした思いがあると思うし、そうした方々に秋田に来てもらうことで秋田の発信にもつながる。

- ・ コンピューター、IT 関連の企業を頑張って呼び込んでもらいたい。波及効果が今、一番期待できる分野だと思う。
- ・ 民の力も頑張って出していないといけない。今は事業が上から降りてきて、仕様が決まってやる形になるが、発想を転換して、地域の課題を知っている我々の民の方から提案し、行政と話し合いをしながら進める仕組みができないか。これができる地域課題解決に向けて有効に予算をつぎ込むことができるのではないか。
- ・ そうしたことを受けられるように、民も頑張らないといけない。課題解決をする人材を連れてきて、向こうの発想で課題解決することもできるのではないか。移住者を増やすことにもつなげていくこともでき、我々も力不足を補うことができる。
- ・ 田舎の総合商社も本当はやりたい。自分たちで開発して、それを営業して売り込んでいきたい。ただし、営業力のある人材が必要。物産を見られる人間、首都圏に行って営業できる人間と最低3、4人はいないとだめ。そういう人材をハントしても良いし、そういう人と結び付けることができれば市町村の魅力が出てくる。総合商社という考え方がよい。
- ・ 移住者と大学生をマッチングさせたい。発想が違う。若い世代にがつんと秋田で働いてもらう、魅力を持って働いてもらう仕組みづくりが秋田県には必要。

●山崎委員

- ・ 提言を考えるに当たって、「子どもの視点」、「再設計の視点」、「創意工夫の視点」、「協働の視点」、「当事者目線」という5つの視点で考えている。
- ・ 移住定住の拡大については、秋田に縁もゆかりもない人が来ていただくというよりは、秋田で生まれ育った縁のある人たちをつなげていくことが重要。
- ・ そのためには様々な手法が必要となるが、高校を卒業して秋田を離れる前に、これからも秋田とつながりのある機会を残すことが重要で、効果があると思う。現在は進学する高校3年生に「県内就職希望登録制度」がある。これは希望者が登録し、県内企業の合同就職面接会などの就職イベント案内が届くというもの。進学する方とつながりを持たせる絶好のツールであるが、昨年度は登録者数が5%に止まっているので、大きな改善が必要と感じた。
- ・ 人口問題対策課でその状況を改善していくということで、若者向け定住・定着「ご縁」システム整備事業を検討している。より良くしていくことによって若者達とつながりを持つことができ、Aターンの向上とか移住・定住の促進につながっていくのではないかと期待しているので、是非説明をお願いしたい。
- ・ 2点目として働き方の見直しであるが、女性が妊娠や結婚、出産、子育てなどをきっかけに離職する率が高く、仕事と家庭・子育てを両立できる働きやすい環境の整備が秋田の課題の一つ。
- ・ 例えば、全国的に保育士不足が言われているが、給与を上げるだけでは解消に結び付い

ていかないように思う。「休みたくても簡単には休めない」という現状が多くあり、制度があっても、職場の理解があっても「代わりがない」「休むと職場に申し訳ない」という思いがあっても、結局辞める事を選択する人もいるのではないかと。

- これは保育業界に限ったことではなく、もっと気兼ねなく休める仕組みがあれば、離職率の低下にもつながっていくかもしれず、育児や介護中の方にも、気兼ねなく休める職場環境は重要で、その仕組みを具体的に提案したい。それは、総合的な人材バンクを創設して、そこからサポーターが派遣される仕組みである。パートやバイトはそれぞれの仕事もあるわけだし、ちょっとした休み、急な休みが必要となった時の仕事の補完ができるサポーター制度を検討してもらいたい。
- サポーターは登録制で、専門学校や大学等の卒業時に登録を求めたり、各市町村の広報紙などで定期的に募集ができるのではないかと。具体的には検討が必要だが、県から民間に委託して雇用主からの依頼に応じてサポーターを手配するという仕組みができないか。
- 最後に子育ての視点から見た時に、秋田県は小中学校の教育レベルの高さや充実した子育て支援、恵まれた食環境という誇りに思う点が沢山あるが、ここに子育て支援、仕事と子育ての両立のしやすさだったり、働きやすさがあれば県の子育て支援に対する満足度も上がっていくし、これから移住を考える際にも秋田に行こうというポイントにもなる。
- 女性が働きやすくて、仕事と子育ての両立が容易にできていくということは、保護者の心にゆとりを持たせることにつながっていくので、子どもにとってもかけがえのない幸せな環境である。心にゆとりをもった保護者に大切に育てられた子どもは秋田に愛着を持つだろうし、自己肯定感も高まっていくので、大人になっても夢を抱いていくのではないだろうか。実際に自分が大人になって、結婚して、子どもを育てる時になっても効果があるのではないかと期待している。

●丑田委員

- 考えている施策をまとめてみた資料をお配りした。次世代ドチャベンのあり方、起爆剤となる人材及び団体の支援については、起業家人材やローカルベンチャーといったような外からの強いインパクトと、外からの人材と中を結ぶような役割を担うコーディネーター人材のように、外からやってくる人とそれを下支えする人のいずれかのキーマン、仕掛け人を、外から移住させたり中から育てる策が重要。
- ここが、人口減の中でどこに投資していくかといった時に、人口減少を歯止めする最初の一步になりえるところで、スモールベンチャーや小さな起業支援も重要となる。
- また、地域の中には実際に雇用もしているが、PRが下手な企業も多い。秋田に帰ってきて仕事がないかなと感じている人が、その情報源を見ていなくてミスマッチしているところをコーディネーションする人が重要。

- ・ 市町村の魅力化、次世代の教育に取り組む人材や若者団体などを支援することで、本質的に地域の活性化につながっていくので、地域の魅力を上げる効果があると思う。そうした地域の魅力化を仕事として担うような、お金を発生させるようなところにきちんとお金が払われるようなことが重要。
- ・ それは地域おこし協力隊に対しても同じで、自治体によっては移住者や起業家を引っ張ってくる、あるいは中から発掘し、移住者が地域に馴染むようにコーディネートするといったような機能を求めているケースもある。
- ・ 協力隊にどのような任を課すのか、先ほどの議論で受け入れ自治体の教育という言葉が出てきたが、どういう町づくりを目指していてどんな協力隊員を呼び込みたいのかというところが必要。
- ・ 自治体によっては協力隊を入れることで街づくりをするという所もある。隊員の定着率が16%と低い状況もあるが、受け入れの段階できちんとした受け皿があるということが大事。先日の有楽町での移住イベントでは秋田にゆかりがない方も多かった。面白いという理由の方が多かった。実際、秋田のどの市町村に行くのか、行けば受け入れてくれるのかという不安も出ていた。そうした興味のある方を受け入れる役割を担う人、団体の需要はある。
- ・ ヨソ者、若者などのプレイヤーを支援してもらうことで、輪が広がって大きな仕組みとしてつながっていくことが、結果として普通の方の小さな起業などに結び付いていく。
- ・ 子育て・教育の既存の魅力に加えて、新しい視点での動き・刺激として、秋田ファンとして狙いたい若者層、子育て層に刺さるような発信がしたい。
- ・ 有楽町の子育て教育体験講座に参加するなど、積極的に行動する人や、県内就職に向けた登録をする人は秋田に興味があったり、秋田を愛していたりする。その他の出身者をはじめとした大多数が、秋田は好きだが帰る気はないかな、という人。でも秋田は好きという潜在的移住層をいかに感化するか。
- ・ 例えば、成人式で秋田が好きかと聞くと「15%程度が好き」という程度が若者のリアルな感覚。都会に夢を持って出て行くが、子どもが生まれた時に秋田は子育てにとってもいいというふうに捉え方が大きく変わった時があった。そういったタイミングの人を逃さない、ファンにすることが大事。
- ・ 今までの情報発信を超えるようなのがった情報発信をしていきたい。例えば、新しい働き方として半農半スキーインストラクターのように半分農業で稼ぐが、残りはスキーで稼ぐというように趣味と仕事を兼ね備えたような生き方ができる。そういった働き方ができる、見える秋田がよい。起業ベンチャーで面白く生きている人がいたり、スモールビジネスで資源をうまく活用していたりと、今までスコープが当たってなかった人を含めた紹介の仕方や、秋田には何もないと言っている、子育てのストレスが少ない秋田の環境があり、そういうものを若者が思わず友達に配ってしまいたくなるようなのがったチラシ、ウェブなどを企画段階から盛り上げられるような会社と一緒に作っていく。そ

れを見た人が、秋田でこんなことをやっているなら行ってみようかというファンづくりにつながる。

- 子育て教育の国あきたづくりではスローガンや宣言が大事。県が力を入れているのは承知しているが、学力、体力では計れない自然の中の生活力や、人間力みたいなものを育てられるのが秋田。子育て、学力は日本一だからこそ、秋田では「人間力育成をはじめます」といった形で発信することで、秋田は学力・体力論議を乗り越えた子育てができるとなれば、秋田は面白そうだなと受ける人に届くのではないか。それを言うていく上では学力・体力の維持は当然だが、更なる面白いところを出していければよい。
- 価値観についても、子育てしている人が、ここで子育てして幸せだと感じられるように、どう捉えるかの価値観を変えていくような親向けの機会提供があればよい。秋田は田舎ならではのつながりを生かした子育てができるところ。
- 積極的子育てや教育疎開的に、子どもだけをホームステイで1年間秋田の教育に触れてもらうような、子どもだけでも外から呼び込むことができないか。呼び込んだ子どもは秋田の魅力を十分に受けて育つことで未来につながるのではないか。

●山本部長

- 丑田委員の包括的に関わる施策というのが好きで、施策はひとつ打てばひとつの効果が出るが、2つ打てば3つの効果、3つ打てば5つとか10の効果を得られるということが大事。それがリソースの配分にも有効で、配付した資料は連関性を持たせようということで作業した途中の絵である。
- 整理し切れていないが、次世代ドチャベンのあり方については冒頭1時間でディスカッションしたので割愛する。
- 次世代への布石として、山崎さん、藤原さんから人間力の形成を含めた教育というのが重要という意見があったが、この部会から発信するものなのか教育部会から発信してもらうものなのか整理が必要。部会の中でも検討事項としてメッセージは出していきたい。
- テーマ2として子育て・教育の国あきたづくりを挙げているが、出生率は西に比べると伸びていないし、少子化に歯止めもかかっていないが、教育レベルも高いし、子育てに対しても魅力のあることは間違いないので宣言してしまおうということ。
- 宣言してしまい、ガイドブックをつくってファンフェスティバルや移住関係の窓口や、県民に配ってしまう。裏付けがないとまずいので、今日の資料にもあるように市町村でもきっちりやっていることを示す。定性的なものも含めて宣言してしまおうというのが施策6である。
- 施策4はマッピングの中で足りないところには手を入れていかないといけないところで、山崎さんが言われた再設計の視点から出てくるような気がする。新たな施策を打つのではなく、今までやってきた施策を整理することでリソースを再配分するのが有効な手立てが出てくるが、それが施策4になると思われる。

- ・ 施策5はテレワークへの環境支援ということで具体的に出てきているが、IT企業の誘致を含めてテレワークの普及はかなり有効である。保育士や介護士が心置きなく休める環境では、保育の拠点といった単位毎に人が電話してつないでいるとキリがない。グループウェアのスケジューラを活用するなど、拠点毎に登録してもらってその人達にウェブや携帯で連絡するようなことができればスムーズに調整できる。そういうことを含めて、働き方の見直しをする時にIT化は必須。具体的な施策として浮かび上がってくると思う。
- ・ 施策7は地域の総合商社に関わってくるが、西日本では地域再生の仕掛け人がいる。5年ぐらい地域に副町長格や観光協会の事務局長という存在で、地域の課題を棚卸して全部洗いざらいし、地域の人材をピックアップして、4年がかりでくっつける。地域が自立したら次の地域に移るような人材がいるが、東北はそうした動きがほとんどない。
- ・ おそらく、震災地ではまだ地域の立て直しに傾斜している人材ばかりと思われる。秋田にはまだほとんどいないので、いきなりやろうとしても難しいため、やっている人間を首長会議などで講演してもらい、首長に危機意識を持ってもらうことが必要と思われる。
- ・ 施策2の秋田ファンフェスティバルは、秋田の物産、移住定住など部局毎にバラバラでやっていたものを年に1回まとめてやれないかというもの。ここには県出身の俳優などから秋田で子育てした理由などを話してもらい、人を呼んで、秋田はこんな面白いものがある、物産コーナーでバイヤーとのマッチングだったり、面白いと思っていたら移住・定住のコーナーがあって、最後は移住してしまったりと、そうした戦略が面白いと思う。何回もやると疲れるので年1回ぐらい大々的に県独自でやるのは面白いのではないかと、として挙げさせてもらっている。
- ・ 以上が私からの提案。
- ・ 県から子育てや移住・定住の資料があるのでその説明と、先ほど話のあった「ご縁」システム整備事業など委員の提言に絡めながら説明をお願いしたい。

<部会資料-2を土田子育て支援課長、部会資料-3を真壁人口問題対策課長が説明>

●山本部会長

- ・ 今までの説明に質問などがあれば発言ください。

●山崎委員

- ・ ご縁システムについて、当事者目線で考えると、システムに登録しようというタイミングは高校卒業ではないかもしれない。登録してもらい使ってもらうことが必要で、例えば、携帯会社と連携して、機種を買う時にアプリがプリインストールされているという仕組みもあっていいのではないかと。
- ・ 情報を出すことは重要だが、日常的に使えるものとして秋田とのつながりを維持する視

点で、地元の情報を流して、それを見たら1ポイント付くような仕組みや、地元の同窓会がアプリを使って情報を流すような活用があればよい。同窓会は同じ世代が集まってくるので、同世代間のつながりが維持できる。秋田に帰ってこようかと思うタイミングでほしい情報が得られるように、長い目で、身近なアプリとしてもらいたい。

●山本部長

- ・ リリースは9月頃になるか。

□真壁人口問題対策家業

- ・ システムの構築に時間がかかるため、まだ流動的である。

●山本部長

- ・ 高校生が秋田から出て行くタイミングでは、秋田に戻ってきて、というメッセージは受け入れられないかもしれない。面白い情報や秋田ファンづくりの目線での情報発信としてもらいたい。
- ・ 例えば We Love Akita に登録してもらい、秋田を忘れないでね、ファンでいてね、というメッセージでもよい。

□真壁人口問題対策課長

- ・ 「ご縁」なので、つながりとして、どういった情報を入れるかはこれから検討していく。

●丑田委員

- ・ 高校生が出て行く時に秋田の情報に対するモチベーションは高くない。
- ・ 流す情報について、どこまで吸い上げるかが難しく、精査する人が大変である。当事者として使う若者がどんな機能を求めているかを把握した方がよい。

□真壁人口問題対策課長

- ・ ポイントシステムを先行して構築するが、提供する情報については随時検討していきたい。

●山本部長

- ・ 地域から提案するというスキームについて、具体的な事例はあるか。

●藤原委員

- ・ 地域に根ざした課題は我々地域住民が把握している。市町村も人口減少で地方交付税が減っていくので、自ずと公共サービスが減り受益者負担が増えることになる。年金暮ら

- しには厳しいが、そうしたことを行政が住民に説明して理解してもらう時期にきている。
- ・ 生活の質として、住民がここで死ねて幸せという満足度、少ない人口でも暮らしていける仕組みを行政と住民が議論することが大事。県も含めて行政は正直な話をしていくべきだろう。

●山本部会長

- ・ 出生率をみても、将来のシナリオは地域毎によって違うが、いずれ崩れていく。コンパクトシティ化も含めて、近い将来のまちづくりではダウンサイジングが避けて通れないので、その議論を置いていくことは危険でもある。
- ・ 今日時間はなくなってしまったので、第2回部会はこれまでとする。引き続き、メール等で議論を進めていくので協力をお願いします。
- ・ なお、第3回部会は提言案の微調整としたいので、事務局には担当者との調整の場を設けてもらいたい。委員はボランティアになるので、よろしければ参加いただきたい。

以上